

助成年度：平成4年度

[所属] 東京大学 農学部

[役職] 助教授

[氏名] 渡辺 達三

[課題]

植物観照における自然・環境意識に関する歴史的研究

－ウメ、サクラ、ハスの観照を事例として－

[内容]

自然と人間との真の共生の実現のためには、両者間で物質代謝上のみならず精神上における妥当な関係の図られる必要がある。

本研究では、“自然と人間の共生”に係る知見を探り出そうとする観点から、人間の支配・功利的利用という点で比較的自由な態度で接してきたとみられる観賞植物のウメ、サクラ、ハスにおける観照行為を通じ、自然・環境に対する意識や態度の歴史的な実態変遷過程をみようとするものである。得られた結果はつぎのようである。

1) 原始的、呪術的自然観から解放され、ある程度の余裕をもって美しい自然に接するとき、人々はそこに自己の魂を集注し、つよい愛着をもって観照するようになる。その態度は純真、素朴で、対象と主体とは同化融合する。サクラは『懐風藻』4で道教の影響を受けた神仙思想やユートピアの象徴などとして登場するが、『万葉集』ではサクラそれ自体ないしはその寓意する女性への憧れや恋愛成就願望などをもって観照される。サクラには呪術性のあったことが窺われ、挿頭にもされている。山野のサクラへの気づかいもみられ、庭園に持ち込まれ、園芸化されるものもあった。ウメは舶来の雅びな花として歓迎され、すぐれて人々の伴侶的な性格を有するものとなった。他方で、サクラの有していた呪術性や挿頭の意義も取り込まれていった。ハスは美女や恋愛の寓意をもって観照された。

2) 仏教的常観の影響をつよく受けて醸成される中古の花鳥風月的観照において、人々の心をうらぎって散り急ぐサクラはその格好の題材となる。ウメでは香りに関心がもたれ、優美な紅梅が歓迎された。ハスでは仏教的世界や浄土、極楽を象徴する性格を強める。全般に、自然をみる目はこまやかになり、対象に対し一定の距離をもって、客観的、理知的にあたるようになる。しかし、自他の区別は曖昧で、ウメやサクラ、ハスは人々のすぐれて交感的、伴侶的な観照の対象であった。

3) 中世では、前代からの王朝的・貴族的流れをくむ契機を残しつつも、武士の興隆と地方農民の生産力拡大とを背景とする地方的・庶民的契機の高まりがみられるようになる。乱世の経験により無常観が深まるが、現実変革の動きも強く出てくる。ウメ、サクラは一方で、超現実的世界において観照されるが、他方で現実感覚をつよめるなかで、時間的、歴史的な面などに着目された観照も行われるようになる。自然や環境への関心も高まる。ハスでも同様な傾向がみられるが、時間、空間、音響、文学などの総合され、再構成された環境において観照されるものも出てくる。

4) 江戸時代では空前の園芸ブームが起こり、ウメやサクラ、ハスの観賞が庶民層にまで行きわたり、その生活に深く入り混んでいった。花鳥風月的観照も隆盛するが、俗化、享楽化し、色あせる。他方で、博物学的関心が高まり、より精緻な観察、観照が行われるようになる。人生、人事上に係る観照では、正面きっての真摯なものは影をひそめ、対象の特性や現象に即したより日常的、現実的なものとなっている。